

# 算盤組立職人

## Vol.02 面接は舞台



「こそ」  
「まあ何にせよだ、これからの自分が  
今までの自分より楽になる生き方を選ん  
だんだよな？」  
彼は軽くうなずいた。  
「ならいいじゃないか。頑張りすぎず  
に頑張れよ！」  
「了解？。てなわけでだよ、佐藤く  
ん。」  
いつもの彼に戻ったようだ。  
「明日面接を受けようと思うんだ  
よ。」  
「そりゃまたエライ急な話だなあ。」  
「今日が募集の締切だったらしいんだ  
よね。で、明日面接と。」  
締切後、すぐ面接を実施するとはあま  
り人が集まらなかったのだろうか。伝統  
工芸の仕事だからそうそう集まると思  
えないから採用決定かな。やれやれ。  
そして面接のため指定された場所に彼  
は向かった。  
「予想通り人が集まらなかったようだ  
なー。」  
閑散としている待合室を見て彼はそう  
呟いた。  
「龍雲さん、お入りください。」  
緊張しながら扉を開いた。  
「げっ。」  
声を出さず表情も変えずに彼は驚い  
た。12人の面接官が並んで座っていたの  
である。  
「円卓の騎士かよー。」  
一列に並んでいるので円卓ではない  
が、彼の語彙で一番近いのはそれだっ  
た。  
「はい、それでは自己紹介をお願いします。  
ます。」  
「えー、私は龍雲と申します。」  
さすが演劇経験者、また通らないであ  
ろう数多のプロジェクト面接を通ってき

ただけあつてスムーズに面接は終了し  
た。  
「いつもながらイヤな舞台が終わった  
よー。」  
「お疲れ様。」  
常に彼は「面接」のことを「舞台」と  
言う。自  
分の事を  
自分の言  
葉で話を  
することが  
とても苦  
手らしい  
ので、  
毎回シナ  
リオを書  
いてその  
「自分」  
を演じる  
らしい。  
とても器  
用なヤツ  
だなと思  
う。  
「で、  
面接の手  
応えはど  
うだっ  
た？」  
「そん  
なの心配  
すること  
ないのだ  
よ、佐藤  
くん。我  
がシナリ  
オに一片  
の隙な  
しー」  
どこか



で聞いたようなセリフだなと思うのだ  
が、それはスルーしておこう。  
「じゃあ来月辺りからめでたく伝統工  
芸の職人だな。」  
「まあ、上手く面接に通つたらなー。  
試合は最後まで何があるかわからん  
し。」

彼が通らなかつたら誰が通るんだ。と  
りあえず安心だな。  
「では追って結果を伝えますよ。」  
「ああ、わかった。期待してるぞ。」  
そして1週間が経ち、面接の結果が届い  
た。  
「な  
っ？」



### profire 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的工芸品づくりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

【工房名 / 職人名】

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)